

コラム 緑化植物 ど・こ・ま・で・き・わ・め・る

モミ (*Abies firma* Sieb. et Zucc.)

田中憲蔵 (独立行政法人森林総合研究所) mona@affrc.go.jp



モミの木と聞くと、多くの方はクリスマスツリーを思い浮かべるのではないだろうか。モミは常緑で、円錐形の美しい樹形をしているため、公園樹や庭木として植栽されることもある。また、古来より社寺にも植栽され日本人になじみのある樹木の一つである。その材は白くて美しく、パルプや建築用材だけでなく、棺材、卒塔婆など葬祭具として古くから使われてきた²⁾。

モミは植物学的にはマツ科モミ属に分類され、同属は北半球に約 40 種分布する。日本のモミ属は 5 種あるが、モミ以外はすべて寒冷地や高山に生育する。モミは日本の固有種で、東北地方から屋久島までの温帯に広く分布し、大きいものでは樹高 40m、胸高直径 1.5mにもなる²⁾。照葉樹林からブナ林への移行帯でよく見られ、コナラやシデ類などと混交林を作ることが多いが、ツガとともにモミ・ツガ林を形成することもある。谷筋など適潤で養分が多く、通気良好な土壌を好む。稚樹は耐陰性を持つが、林縁やギャップなど比較的明るい環境で生育が良く美しい円錐樹形となる。相対照度 5%以下の林内での生育は不良で、著しい傘型樹冠を示す⁵⁾。根は深根性で、根回しによる発根性が悪く移植は難しい。

モミは雌雄同株で、4月～5月ごろに開花し、球果は10月ごろ熟す。熟した球果は中軸を残してばらばらに脱落し、中に入っている小さな羽根をつけた種子が風に乗って散布される¹⁾。しかし、多くの種子は親木の下で見つかり豊作年には沢山の種子を集めることができる。種子の豊凶はおよそ1～3年間隔である⁶⁾。種子は乾燥させ低温に保つことによって数年間は貯蔵でき、6年後でも80%以上が発芽した例もある。



写真 モミの芽生え(左)と深根性を示す稚樹の根(右)
稚樹は樹高約2mであったが根も2m近くの深さがあった。

また、発芽率は2 程度の低温処理を1～2ヶ月行うことで高まる。4月ごろ播き付けを行うと、3週間程度で発芽を始め6月上旬には出揃う¹⁾。大規模に造林されることはほとんど無いが、長野県では諏訪大社の御柱となるモミを育てるため、地元の有志によって植林が始まっている。

モミは、戦後の拡大造林による樹種転換の結果、その多くが伐採され失われて来た。さらに近年では、酸性雨など大気汚染による被害を受け、都市近郊で見かけることも少なくなった³⁾。また、シカによる食害が増加し、更新阻害も起こっている⁴⁾。モミの木が忘れ去られ、日本人にとって馴染みが薄くなる日が来るかもしれない。しかし、意外なことに、遠くはなれたアメリカ合衆国で日本のモミの人気があるようなのだ。北米にも、多くのモミ属樹木が生育するが、高温や乾燥に弱く寒冷地でしか育たない。しかし、日本のモミは、世界のモミ属の中でも例外的に耐乾性・耐暑性に優れ、合衆国の中南部まで生育可能である。また、モミの整った樹形や、常緑で美しい葉もアメリカ人に好まれているようなのだ。そのため、公園樹や庭木、また盆栽やクリスマスツリーとして重宝され、種子や苗木がインターネットなどで取引されている。アメリカで元気に育ち、人々に愛されている日本のモミの木にぜひ会ってみたいものである。

引用文献

- 1) 浅川澄彦・勝田柁・横山敏孝編 (1981) 日本の樹木種子 針葉樹編, 林木育種協会, 150 pp.
- 2) 平井信二 (1980) 木の事典 5巻, かなえ書房, 95 pp.
- 3) 中根周歩・佐久川弘・井川学 (2000) マツ・モミ林衰退地域での大気環境と樹木被害の実態, 日本生態学会誌, 50: 319-324.
- 4) 小川乃生子・吉田茂二郎・溝上展也・村上拓彦 (2006) 霧島山系のヒノキ人工林に侵入したモミ稚樹の成長量と林床光環境の関係, 九州森林研究, 59: 147-149.
- 5) 田中憲蔵・米田令仁・二宮生夫 (2000) 異なった光環境下で生育するモミ稚樹の形態と光合成能力の変化, 愛媛大学農学部演習林報告, 38: 11-21.
- 6) 汰木達郎・荒上和利 (1973) モミ,ツガの天然更新に関する研究(I), 九州大学農学部演習林報告, 47: 77-124.